

一般演題

わが国の障害者スポーツの歴史の変遷とその特徴

○藤田紀昭 (同志社大学スポーツ健康科学部)

【目的】障害者スポーツ関連団体の設立状況、障害者スポーツセンター設置状況、障害者スポーツに関する出来事、競技記録の変遷等を総合的に調査し、わが国の障害者スポーツの変遷の特徴を明らかにすること。

【方法】障害者スポーツに関する過去の文献調査、各種競技団体ホームページの閲覧、障害者スポーツセンター調査、パラリンピック、ジャパンパラリンピック、大分国際車いすマラソン大会等の記録の変遷の調査等、パラリンピックに関する新聞記事等を総合的に分析する。

【結果】

- ・視覚障害者および聴覚障害者のスポーツに関しては他の障害者のスポーツに先行して制度化されていた。肢体不自由者のスポーツは東京パラリンピックを契機に普及振興がはかられるようになった。知的障害者のスポーツは肢体不自由者から20年ほど遅れて振興されるようになり、精神障害者のスポーツはさらに20年ほど遅れて振興されるようになった。
- ・障害者スポーツセンターのほとんどは1970年代から1980年代に設置されている。1990年代以降作られた障害者スポーツセンターはこれらの施設をリニューアルしたものが多く。
- ・国際大会のT54クラスの記録の伸び方を見ると1970年代から1990年代中盤までの伸びが大きく、それ以降は伸びが小さい。
- ・パラリンピックを中心とした障害者スポーツの報道は1964年の東京パラリンピックの2年ほど前から始まった。しかし、それ以降ほとんど報道されていない。長野パラリンピックの2年ほど前から再び取り上げられ、長野パラリンピックの年に急激に記事数が増加した。パラリンピック期間中の記事は長野パラリンピックまでは社会面に、それ以降スポーツ面に掲載される割合が多くなった。

【考察】わが国の障害者スポーツの施設や指導者制度に関わる基盤は1970年代から80年代につくられ、1990年代以降スポーツとして認識され発展してきている。

社会開発に通ずる障がい者スポーツ振興に関する研究
—カンボジア王国のパラリンピック出場に着目して—

○浅岡知希 (同志社大学大学院)

【目的】本研究はカンボジア王国のパラリンピック出場事例に着目し、パラリンピック出場までの過程、パラリンピック出場後の選手自身や社会の変化を明らかにすることを目的とする。またそこから障がい者スポーツ振興による社会開発の可能性について検討する。

【方法】本研究の分析枠組みは、岡田 (2008) により構築された分析枠組みを参考にした上でその一部を改編したものをを用いる。調査対象は、シドニーパラリンピックに出場した障がい者バレーボールチームの選手や関係者とする。岡田の分析枠組みを改編したインタビュー内容を作成し、半構造的インタビューを用いて行う。インタビュー内容を整理し、障がい者バレーボールチームの変遷に伴う選手自身の変化、選手や関係者が感じた社会の変化を明らかにする。このようなことから開発途上国での障がい者スポーツ振興による社会開発の可能性を検討する。

【結果】国外からのNPOスタッフによりカンボジア王国で障がい者バレーボールリーグが設立された。設立した意図は選手自身の身体面、精神面への効果やスポーツを通じて障がい者に対する差別を是正することへの期待からであった。選手たちは障がい者バレーボールリーグの設立からパラリンピック出場までの経過の中で、体力面での向上とともに自信を持つなど心理面で

の変化がみられた。またパラリンピック出場後から障がい者バレーボールリーグに企業がスポンサーにつき、メディアに取り上げられるなど周囲の変化もみられた。

【考察】先行研究と同様に今回の事例からもスポーツ活動の発生におけるキーパーソンの存在が明らかとなった。また開発途上国での障がい者問題の改善に向けて求められている「エンパワメント」と「メインストリーミング」に対して、障がい者スポーツ振興の有用性が示唆された。

ドイツ・ニーダーザクセン州の特別支援学校におけるスポーツ授業

○安井友康、千賀 愛 (北海道教育大学札幌校)
山本理人 (北海道教育大学岩見沢校)

【目的】障害者の権利条約に見られるとおり、インクルージョン社会の実現に向けて地域生活への移行が進む中、学校卒業後のスポーツ活動への参加に向けた支援の重要性が高まってきている。一方、障害児の体育授業については、運動量の確保や体力作りが重視されがちであり、教育内容や教師の専門性の確立に関する模索が続いている。筆者らは、これまでドイツを中心に地域における障害者の余暇・スポーツ活動の支援に関する調査を行ってきた。本研究では、ニーダーザクセン州の特別支援学校とその分教室でのスポーツ授業を紹介するとともに、個々のニーズへの対応と地域への移行に向けたスポーツ支援の視点について検討する。

【方法】ドイツ・ニーダーザクセン州の特別支援学校リンデン学校とその分教室、ヤースシュ・コルチャック特別支援学校(センター)のスポーツ授業について、2005年3月から2011年(6月30日)まで計8回(延べ16日間)訪問し、スポーツ授業に関する参与観察と映像記録・関係者へのインタビューを行った。

【結果と考察】比較的重度の障害児を対象にしたリンデン学校では、近隣の通常学校との連携のもと、分教室でのスポーツ授業、通常学級との共同のスポーツ授業など多様な形態で、個々の児童生徒の発達課題に配慮した活動とともにインクルーシブなスポーツ授業がおこなわれていた。さらに休憩時間や自由時間を活用したカリキュラムにおいて、卒業後のスポーツ参加に結びつくような活動への配慮も行なわれていた。一方、発達障害児を主な対象にしたヤースシュ・コルチャック特別支援学校では、「楽しく体を動かす」体験を通して身体のコーディネーションなどの基礎的な体の動かし方を、学ぶとともに、対人関係や卒業後のスポーツ活動への自立的な参加に向けた取り組みが見られた。さらにこのような取り組みは、進学先の職業学校(Berufsschule)におけるスポーツ授業にも、つながっている様子が見られた。

アダプテッド・スポーツ支援の実態と課題

○原子はるみ (函館短期大学)

【目的】アダプテッド・スポーツにおける人的、物理的、経済的支援の実態を明確にし、地域のアダプテッド・スポーツ振興の課題を探索する。

【方法】障害児・者スポーツ教室利用者、ボランティア養成およびスポーツコーディネーター研修の参加者を対象にアンケート調査を実施した。

【結果】利用者に対する支援については概ね満足しており、充実していた。ボランティア調査では、障害の基礎知識の習得あるいは支援の方法についての研修が課題として挙げられた。コーディネーター研修については回数を増やすことや地域の他団体